



よみさんぽ

2022

Vol. 40

まち歩き 8

東武野田線を歩く；七里駅



記録写真家 柿内未央

東武野田線を歩く；七里駅

東武野田線沿いを紹介してきたまち歩きシリーズ。北大宮駅、大宮公園駅、大和田駅ときて、シリーズ最後は七里駅です。やどかりの里が活動を始めた場所であり、「やどかりの里」の名前の由来でもあります。今回はまち歩きをしながら、七里の歴史をたどってみました。

「七里」の歴史は、1913（大正2）年に、^{ひざこ ひがしみやした おおや さる がやと}藤子・東宮下・大谷・猿ヶ谷戸（蓮沼）・^{ふつ との にいつつみ ひがしもんぜん}風渡野・新堤・東門前の7か村が合併し、「七里村」と命名されたことから始まります。1955（昭和30）年になると、七里村を始め、^{さしおうぎ まみや うえみず}指扇・馬宮・植水・^{かたやなぎはるおか}片柳・春岡の六か村が大宮市に編入合併。2001（平成13）年に浦和市・大宮市・与野市が合併してさいたま市へ。そして、2003（平成15）年にさいたま市が政令指定都市に移行したことで、さいたま市見沼区の地区となりました。

実は乗降者数が多い七里

現在、駅舎工事が進む東武野田線「七里駅」は、1929（昭和4）年、風渡野に開通しました。現在では、1日の乗降者数が15,000人を超える駅となっています。大宮駅（101,472人）には及びませんが、北大宮駅（5,374人）、大宮公園駅（7,002人）、大和田駅（15,760人）と比べてみると、実は利用者数が多いことがわかります（2020年度1日平均）。



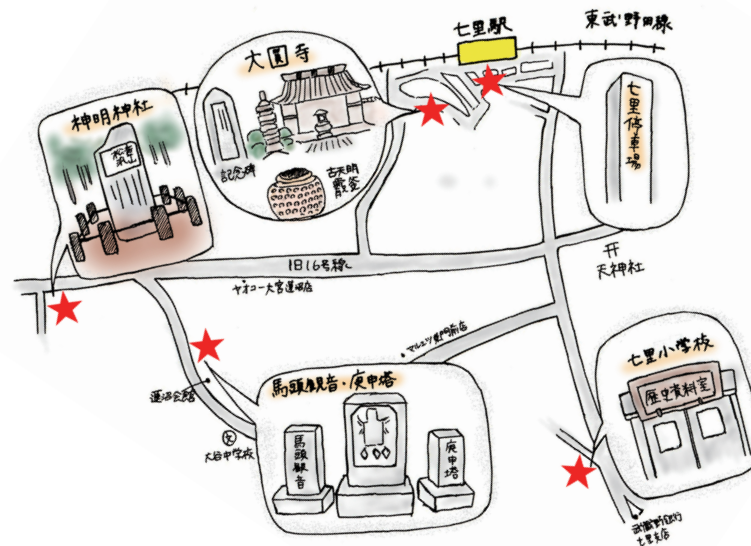
七里停車場道路元標

そんな七里駅の南方 70 メートルには「七里停車場道路元標」が建っています。私の目にはすでに風景となっていました。 「是ヨリ二丁 右原市 蓮田みち 左大門 鳩谷みち 県庁ヨリ 11.5 軒（キロメートル）……」と刻まれています。大宮公園駅、大和田駅、七里駅の開業に伴って昭和 5 年に建てられたもので、もともとは七里駅の東方 200 メートルの踏切近くにあったものが、現在の位置に移設されたそうです。

指定文化財が眠る大圓寺

七里駅を背にして向かったのは、風渡野にある曹洞宗の寺院、^{だいえんじ}大圓寺です。

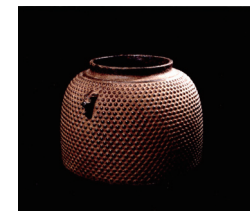
七里まち歩きMAP



大圓寺は、室町時代末期の武将、太田道灌^{どうかん}にゆかりのあるお寺です。江戸城の築城で知られる道灌は、岩槻城を築いて以来^注、旧大宮市東部と関わり深い武将です。大圓寺は室町時代の創建で、道灌の孫である資高^{すけたか}と、その子である康資^{やすすけ}の妻が檀那となって開いたと伝えられています。大圓寺に保管されている、道灌愛用の茶の湯釜^{こてんみょう}「古天明 霰釜」は、さいたま市の有形文化財（工芸品）に指定されています。こちらの方^{うま}にお聞きしたところ、通常は千年の御て一般公開されているそうです。次回は2お目にかかりたいものです。



大圓寺



大圓寺古天明霰釜

大圓寺の広い境内を歩くと、歴史を感じさせる本堂
と鐘楼、そして、第23代内閣総理大臣・清浦奎吾の記

注) 岩槻城の築城者をめぐっては諸説あります。



清浦奎吾記念碑

松沢章山碑

念碑がありました。清浦は、1872（明治5）年の学制発布により大圓寺に開かれた風渡野学校（現七里小学校）で、初代校長を務めた人物です。こんな近くに総理大臣ゆかりの場があったとは……。

ふるさとで教育に力を注いだ松沢章山

旧16号線沿いを大和田方面に向かい、蓮沼にある神明神社を訪れました。静かな住宅街の中に佇み、御祭神は天照大御神です。こちらの境内には、先述の清浦と風渡野学校で同僚だった、松沢章山の記念碑があります。蓮沼出身の松沢は、近代教育が開始されると、風渡野学校・堀崎学校・大和田学校などで教鞭をとり、多くの学生に慕われていたといえます。彼の功績を称えた記念碑は、清浦の撰文によるもの。ここ七里は、教育者と関わり深い街なのですね。



神明神社

現代に残る江戸時代の道しるべ

来た道に戻り、蓮沼会館のある通りを行くと、会館手前に3つの石像がありました。馬頭観音と康申塔です。看板によると、左の馬頭観音は江戸時代後期（1819）に立てられ、右側面に「この方 ふかさく はらいちみち（原市道）」、左側面には「右いわつき 左をふみや（大宮） 大山道」と彫られ、市内だけでなく、上尾市原市、岩槻市、江戸時代中頃から流行した大山詣で知られる、大山阿夫利神社（神奈川県）への方角が刻まれているようです。江戸時代の人たちにとっての道しるべが、現代ではパチンコ店の裏側にあり、何とも時代の対比が印象的でした。



馬頭観音と康申塔

歴史を残す七里小学校

清浦氏の足跡をたどるうち、七里小学校にある「歴史資料室」の存在を知り、お邪魔させていただきました。

この資料室は、七里小学校の創立130周年を記念して2002年度につくられたものです。教頭の丸山謙一先生によると、当時の校長が100周年記念行事の準備を進めていた折、実はそれよりも以前、前身の風渡野学校から130年続く歴史があることがわかったそうです。その歴史と伝統を伝えるために、資料室が設置されました。学校関係者や地元住民より多くの資料提供を得て、500点以上に及ぶ写真や学校道具などが教室いっぱいに収められています。七里の歴史、昭和期からの校舎の変遷、児童の様子、昔使われていた教科書……どれも貴重なものばかりです。1906（明治39）年当時の学校日誌が保管されていたことには驚きました。



七里小学校歴史資料室

そして、清浦氏の生涯や新聞記事をまとめたコーナーもあります。子どもたちの学び舎に、教育に心血を注いだ先達の歩みが残されていることに、胸が熱くなりました。清浦氏もきっと喜ばれているに違いありません。

いつもなら自転車で素通りしてしまう道も、注意深く歩いてみると、たくさんの発見がありました。同時に、その土地の歩みや歴史を伝えようとしてきた人たちの存在にも気づかされました。目にした看板1つ1つもそうです。

まち歩き以降、道端にある石碑や石像、道案内などを見るようになりました。私たちが何気なく歩いている道には、そこで生きてきた人たちの歴史がつまっています。そう考えると、何だかわくわくしてきませんか？



清浦氏について伝えるコーナー

今回のまち歩きでたいへん参考にさせてもらったのが『大宮をあるくⅠ～東部編～』（大宮市教育委員会、1988）です。本書の冒頭にはこう書かれています。「本書が自分のふるさとに目を向けるきっかけになれば幸い」であると。

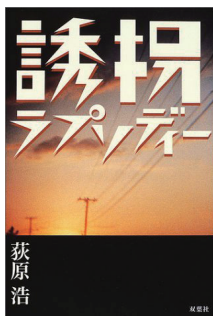
皆さんも、ぜひまち歩きをしながら、自分の暮らす地域に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

（記・イラスト 萩崎千鶴）

七里も出てくる

さいたま市が舞台の小説

並木せつ子



『誘拐ラブソディー』
双葉社 2001 年刊

大宮市内を〔地図上で〕眺めてみた。……七里。／これか。大宮市のはずれだ。小説のなかにこんな一行をみつけたら、ちょっと嬉しくなりませんか。これは萩原浩の『誘拐ラブソディー』に出てくる文章です。

主人公は伊達秀吉^{だてひでよし}、38 歳。家族も家も金も仕事も無い、あるのは 320 万円の借金と前科と、親方から盗んできたクルマだけ。大宮競輪に最後の望みを託して来たのに……。現在の所持金は 635 円。もう死ぬしかないと、見沼を見下ろす公園に来ました。そこへ突如現れたのは幼稚園児の篠宮伝助^{しのみやでんすけ}。秀吉はいかにも裕福そうな伝助を見て、身代金目的の誘拐を思いつきます。うまい具合に伝助は家出をしてきたというではありませんか。秀吉は自分の強運に気分上々です。

ところが伝助の父親は県南を牛耳る八岐組^{やまた}の組長だったのです。それを知らずに秀吉は何度も身代金要求の電話をし、気がつけば八岐組の組員とマフィア、両方から命を狙われるという物騒な立場になっていました。

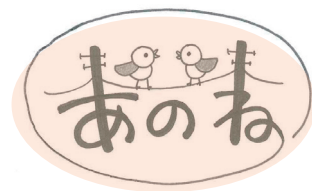
そこで二人は伝助のおばあちゃんがいる「ナナリ」へ行くことに。冒頭の文章は埼玉県^{埼玉県}の地理にうとい秀吉が、地図で「ナナリ」を探していたところなのです。地図をたよりに見沼区へ来ましたが、おばあちゃんの家は見つかりません。

どこまでが七里という場所なのかよくわからない。古くからの慣習的な地名らしく、住居表示はすべて違う名前だ。／「七里病院」／「七里総合公園」／「七里団地」／そうした看板や表示で、ようやくここがめざした場所であることがわかる。

しかし巡っているうちに根本的な間違いに気づきました。

「コーポナナサト」と書いてある。…あっちゃ〜。…ここはナナリじゃない。ナナサトという名前の土地なのだ。

危機一髪、てんやわんや、の 3 日間。伝助との間には奇妙な友情が芽生え、死ぬつもりだった秀吉も＜もう一度最初から、すべてを始める＞気持ちになります。



よみさんぽ編集委員のつぶやき

納豆に砂糖を入れますか？

お雑煮に何を入れるかは、お正月の楽しい話題のひとつだ。何人か集まれば、それぞれの出身地の餅の形や、具材の多様さに驚く。2020 年 1 月のこの欄で、宗野文さんが「あんこ餅を味噌汁に入れたのが大好物」と書いていた。そんな食べ方があったのかと驚くが、自分が人に驚かれることもある。

納豆に砂糖を入れる、というと皆が大体同じ顔をする。もうだいたい慣れてきたので、わざと言って反応を楽しむ。我が家では、納豆に醤油と辛子、そして砂糖を混ぜて食べる。私の両親は福島県郡山市の出身で、私自身もずっとその食べ方に馴染んできた。「納豆に砂糖を入れますか？」（新潮社、2013）という本によると、これは新潟や東北の寒い地方に見られる食文化らしい。かつて家庭で納豆を作っていた時代、寒さで発酵が進まないで、ネバリを出すために入れたのが始まりではないかと考察している。甘じょっぱいのが好き、という好みの問題ではないらしい。

餅の話に戻ると、大根おろしと醤油を絡めた「からみ餅」の存在を知ったのは、浦和の職場で働き始めた頃だった。この食べ方は各地にあるようだが、埼玉県周辺を中心としているという説もある。いずれにしても、職場の先輩に「知らないの？」と言われることになる。この辺りの人は、これが全国共通の食べ方ではないことに、きっと気付いていない。

当たり前^{当たり前}に食べている毎日の食事は、その土地の文化を受け継いでいると同時に、今はその土地に住んでいなくても、その人の習慣の中に先祖の文化を受け継いでいる。そう考えると不思議な気持ちがする。地域の中に様々な文化や背景を受け継いできた人たちが一緒に暮らしている。どうして、混ざり合って全てが均一になってしまわないのか。その答えは、その土地に特有の気候や食材など、ずっと変わらないものがあるからなのだろう。こう書いてきて、つなぐ・つくるプロジェクトのテーマのひとつである「見沼らしさ」への理解まで、もう一歩という気がしてきた。（記 山田 玲子）

参考 野瀬泰申：納豆に砂糖を入れますか？ ニッポン食文化の境界線、新潮社、2013

初春の陽を溜める

湯を溜めるように

外出先などでのパソコン作業用に、割と大きめのバッテリーを持っています。一番の理由は、車内泊で使うためなのですが、災害が起こった時の電源確保の役割も兼ねています。車のシガーライターや自宅のコンセントから充電することもできるけれど、晴れている日は屋上にソーラーパネルを出して、入れ物にお湯を溜めるかのように充電し、職場での電源としても利用しているのです。

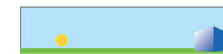
二次的な利用

大学生の頃、教授の勧めで取り組んでいた研究テーマは、簡単に言えば太陽光パネルをカッコよく使う方法を考えることでした。まだパネル自体も無骨で、建物の屋根に載せるくらいしか設置方法もなかった時代。透明なパネルを開発したり、建材との一体化を考えてみたり、メーカーも様々な可能性を模索していて楽しい時代でした。しかし、研究を進めていくと造形に拘るだけ発電効率を落とす結果になり、あとはメーカーの技術開発に頼るだけ、というジレンマを抱えていました。悩んだ結果、発電した電力で水を流すことを思いつきました。電力を直接空調に使うのではなく、その水が生み出す気化熱で地域的に冷やすアイデアでした。

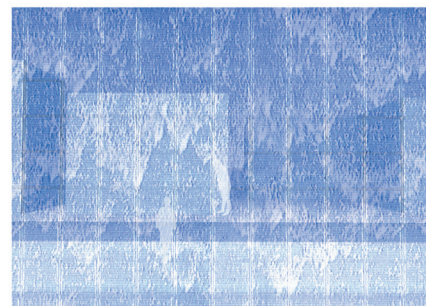
一陽来復

研究した成果は、ヨーロッパのコンペで発表しました。効率性や凝った技巧の代わりに、日差しがもたらす見え方の変化と発電した電力における物語を大事にした提案として、なかなかの評価を得ました。その時、教授が求めていたことは、物語を示すことだと理解したのです。昨今、高効率を目指し、暴力的に設置されていくメガソーラーを目にすると、物語の大切さを感じます。

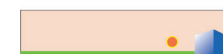
冬至現在も、私は仕事をしながら屋上で湯を溜めています。冬の日差しは弱く、満身に充電は進みません。しかし明日からは、一陽来復のごとく、段々と日差しが力強さを取り戻していくことを発電のスピードから実感するでしょう。



10 o'clock in the morning, the sun rises from a low angle and gleams over all the PV panel but the amount of light is not so much so the amount of generated electricity is not so much either. this means that the amount of water that runs down the walls is not so much.



13 o'clock in the afternoon, the sun beams on the PV panel most strongly. The amount of electricity produced is also max so the water flow is also max. With the max water flow, it is hard to distinguish the outside view from the inside. The water will not over flow because as the "water screen" gets thicker the amount of light that gets to the PV panels decreases so the "water screen" will be stable.



17 o'clock in the afternoon, the sun's power starts to weaken and the amount of ray that gets to the PV panels gets less. Around this part of the day, the color of the sunset and the color of the PV panel bend and make a beautiful harmony of color.

(IEA コンペ案抜粋／筆者ほか 作)

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975 年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）を複数行う。（写真 新 良太）





未来を拓く

つなぐ・つくるプロジェクト・8



住民による住民のための電力のある街づくり

～藤野電力の取り組みから考える～

私たちは、電気を活用して暮らしを豊かにしてきました。自宅のコンセントに差し込めば、当たり前で電気を使えるようになっています。しかし、3.11 東日本大震災や近年の様々な風水害等の自然災害で停電が続いたり、計画停電等で電気が使えなくなってしまうこともあります。また、発電によっては、地球環境に大きな負荷を与えてしまうことも大きな問題となっています。

そこで、FEC 自給圏という考え方が近年注目されています。食糧 (Foods) とエネルギー (Energy), ケア (Care = 医療, 福祉) をできるだけ私たちの住む地域内で自給することで、災害などの影響を小さく抑えることができたり、地域の中で雇用を生み出したり、市場や海外などの経済活動に過度に影響されず、地域が自立していくことにつながっていくと言われています。私たちも、この自然豊かな見沼地域でできることがないか、考え始めています。

藤野を訪れて

本プロジェクトでは、地域の拠点づくり (いつでも立ち寄れる場所) を進め、FEC の考え方を土台にしたソーシャルファームを構想しています。SDGs を意識するとエネルギーのことは避けて通れません。そこで、まずは藤野電力 (神奈川県相模原市) が主催する、ミニ太陽光発電システムを組み立てるワークショップに参加し、いずれ見沼地域でもワークショップを開催できるよう学ばせていただきました。藤野電力は、企業ではなく地域の活動団体で、3.11 東日本大震災、福島原発事故を機に活動を開始し、「トランジション藤野^{*}」の活動のひとつです。震災後の計画停電の際に、真っ暗で不安な闇に包まれた街中に、唯一煌々と明かりを灯す太陽光発電を使った接骨院を見た住民の 1 人が、自分の家も同じように作って欲しいと言ったことがきっかけとなったそうです。

藤野は神奈川県相模原市緑区の北西部にある森と湖の街 (旧藤野町) で、人

口は約 8,500 人。都内とのアクセスが良く、都心に勤務する人が多いようです。自然志向の人や、新しい暮らし方を模索する人などの多様な横のつながりがあり、自然と暮らしに関わる市民活動も盛んな地域です。

ワークショップに参加して

ミニ太陽光発電システムは、ソーラーパネルやバッテリーなど、4つの部品で構成され、それらを配線してつなぎ合わせることで出来上がる、シンプルな作りでした。当日は4組が参加、毎回、全国各地から参加者が集まるようです。まずは電流と電圧についてなど、電気の基本的な知識についてのレクチャーを受け、発電システムを組み立てていきました。日頃私たちが使用している電力量が、発電できる量に比べて、いかに大きいかを考えさせられます。そして、自宅の白熱電球 (60 W) を LED 電球 (8 W) に替えるだけでも、大きな節電につながることを改めて実感しました。このワークショップを通して、電気 (エネルギー) について、電力会社任せにするのではなく、私たちにもできることはありそうだと視野を広げてもらいました。

ちなみに、今回作成したミニ太陽光発電システムは、本プロジェクトで取り組んでいる地域巡回イベントで、携帯電話の充電が体験できる企画としてデビューしました。見かけたら是非体験してみてください。

(記 鈴木 裕貴)



ワークショップにて点灯確認



地域巡回イベントでデビュー

※トランジション藤野/トランジション・タウンという、しなやかで強い、持続可能な街づくりを掲げる取り組み。トランジション藤野では、「やりたい人が、やりたいことを、やりたい時に、やりたいただけやる」をモットーに、藤野電力をはじめ、地域通貨を作ったり、森林の皮むき間伐、被災地支援、食と農に関する様々な活動、里山長屋づくりなど、参加する市民が主体となり多様な活動を創出。

未来を拓く つなぐ・つくるプロジェクト 2020 事務局

〒337-0026 さいたま市見沼区染谷 1177-4 やどかり情報館内

TEL 070-3260-2020 FAX 048-680-1894

e-mail: tt.prj2020@gmail.com

#つなぐ・つくるプロジェクト



ヤギ日誌

ヤギの1日



やどかり情報館（見沼区染谷）にやってきた2頭のヤギ、喜々と楽々は、もうすぐ1歳を迎えます。人間で言うと（個体差もありますが）18歳くらい、あっという間に大人のヤギの仲間入りです。

今回は、お世話をしている目線からヤギの1日をご紹介します。

7:30

朝、いつも小屋の掃除をしてご飯を用意しているお世話担当のお兄さん。小屋に向かうと、「ごはん、待ってました！」と言わんばかりに「メェ〜」と泣き始める喜々と楽々。いつも可愛がってくれるお兄さんのことが大好きな2頭は、嬉しそうについて歩きます。

「ヤギは何を食べているんですか？」とよく聞かれますが、チモシー（乾燥牧草）を中心にいろんな葉を食べます。毒草など、食べてはいけないものも多いですが、ヤギは嗅ぎ分けて食べられるものを選んでいきます。

お散歩も楽しそうですが、近所を歩くとずーっと道端の草を食べ続けるので、泣く泣く引っ張りながら歩きます。

12:30

お昼になりました。小屋の掃除に向かいます。コロコロとしたフンを掃きませんが、掃いたそばからコロコロコロ……なかなか掃除は終わりません。



手前から喜々と楽々



お兄さんとヤギ

天気の良い日は日向に寝そべてのんびり過ごしている2頭です。

ヤギの冬場の好物をご存知ですか？ 実は、どんぐりが大好きなのです。拾ってきたどんぐりをあげると、取り合うようになります。でも、ヤギにとってどんぐりは栄養過多、あげすぎには要注意です。最近は、にんじんが大好きなこともわかりました。



にんじんが大好き

17:00

1日ご飯を食べ続け、チモシーも少なくなってきました。夕方のお世話担



立ち上がる喜々

当のお姉さんがご飯の用意と掃除をして、この日のお世話は終わります。夏場は暑さと蚊が天敵で、蚊取り線香を焚くのが必須です。



つぶらな瞳で見上げる楽々

普段はおとなしい楽々(♀)ですが、時折元気いっぱい、突撃してくるのが困りもの。楽々に背中を向けたら最後、肩に前足を乗せ、すごい力で肩たたきするよう

に乗っかってくるのです。背中中はあっという間に泥だらけ。体も大きくなり、その力に押されることもあります。表情は変わらずかわいらしい喜々と楽々です。



冬毛もこもこ

ヤギの日常をご紹介しました。人が通ると傍によって鳴く、人懐っこいヤギたちです。喜々と楽々を見かけたら、ぜひ可愛がってあげてください。冬場のもふもふした毛は今だけのお楽しみです。

（記 萩崎 千鶴）

人と人とのつながりで
安心安全な未来へ向けたまちづくりを

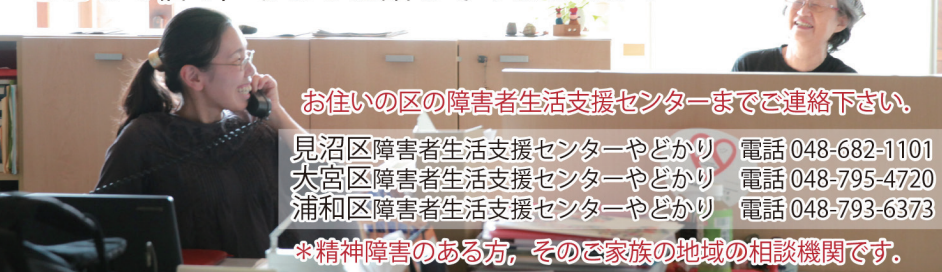


清掃スタッフ
募集中!!
△応募はこちら

M. 今日も 明日も そっと。
毎日興業株式会社

〒330-0842 埼玉県さいたま市大宮区浅間町2-244-1
TEL : 0120-156365 (フリーダイヤル) <https://www.mainichikogyo.co.jp>

こころの悩み、ちょっと話してみませんか?



お住いの区の障害者生活支援センターまでご連絡下さい。

見沼区障害者生活支援センターやどかり 電話 048-682-1101
大宮区障害者生活支援センターやどかり 電話 048-795-4720
浦和区障害者生活支援センターやどかり 電話 048-793-6373

※精神障害のある方、そのご家族の地域の相談機関です。

片柳地区社会福祉協議会

つながりを大切に活動しています

048 (686) 8601

開設時間
月曜日～金曜日
10時から16時



「よみさんぽ」配布ボランティア募集

やどかりの里では、障害のある人で分担して、地域の皆さんによみさんぽをお届けしています。お散歩のついでなどに、ご近所に配ってくださるボランティアを募集しています。地域や部数はご相談させていただきます。

連絡先 048-680-1891 (やどかり情報館：萩崎まで)

◆高齢者向け弁当の調理補助のパートさんを募集しています

8:30～16:30
月～金曜日(日数、曜日について応相談)
時給970円 【お問い合わせ】048(686)7875(金子)
(月～金・祝日を除く、8:30～17:30受付)
エンジュ 〒337-0042 さいたま市見沼区南中野 286-1



◆新年度やどかりの里正職員募集

2022年度新採用(精神保健福祉士、社会福祉士)の募集をしています。
詳しくはやどかりの里HPか、右記QRコードを参照ください。
お問い合わせ)やどかりの里法人事務局 048(686)0494



すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために

こうぬまふくしかい
社会福祉法人 鴻沼福祉会

こころを込めた手づくりの品をぜひ一度お試しください



いちず
とうふ屋 一豆

TEL 048-854-8000
FAX 048-854-3538
さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、国産・手づくりこだわった本格とうふ。宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を100%使用し、オリジナル惣菜も人気です。大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる「小さなぜいたく」を食卓にお届けします。

きりしきのパン

TEL 048-854-6910
FAX 048-854-6942

さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内

きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心にこだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。(一部商品を除く)
職人とともに手がけるパンは、少し懐かしい味と香りがします。



弁当屋 いちず

TEL・FAX 048-684-1257 さいたま市見沼区染谷2-145

そめや共同作業所のお弁当は旬を感じる手づくり弁当です。
野菜をたくさん取り入れ、手が込んでいると女性に大人気です。

鴻沼福祉会から読者の皆様へ

- 鴻沼福祉会では、袋詰め・部品組み立て作業や清掃作業、資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な仕事を受注しています。働くことをおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて新しい仕事にもチャレンジしつづけています。
- 障害のある人たちの就労支援、生活支援、相談支援のスタッフを募集しています! 問い合わせ先: 048-854-6890 (担当オガワ)

鴻沼福祉会事業所一覧

- 本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL: 048-854-6890 FAX: 048-856-0313
- 《はたらく》●つばさ共同作業所(中央区) ●あざみ共同作業所(見沼区) ●そめや共同作業所(見沼区) ●きりしき共同作業所(中央区)
- 《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえでホーム ●かりんホーム ●よつばハイツ
- なつめホーム(以上、中央区) ●のぞみホーム(見沼区) ●ひかりホーム(西区)
- 《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢(以上、中央区)
- 見沼区障害者生活支援センター来入(見沼区)

さいたま見沼よみさんぽ

作者紹介

記録写真家 柿内未央さん(表紙写真)

“人としていかに生きるか”について考えるなかで、平和の基盤は自然との共生にあると痛感し、埼玉県明石農園にて自然栽培を学ぶ。

生かされていること、全ての本質が等しくつながり合っていることを感受してから世界が変わり、その一部として生きたいと思うように。

自然とヒト・人と人をむすぶお手伝いがしたく、“自然とヒト”……いのちの記録をメインに活動している。

ホームページ <https://lit.link/kakiuchimio>

表紙写真によせて

「私たちが何気なく歩いている道には、そこで生きてきた人たちの歴史がつまっています」

“まち歩き8 東武野田線を歩く;七里駅”に寄せられていた言葉から、鹿兒島のガイドさんが道路を指さし西郷隆盛が最期横たわっていた場所だと教えてくれたことを思い出しました。見返した旅の記録には、こうありました。

知らなければ
気にせず通り過ぎたであろう景色。

どこにでも歴史……いのちの跡は在って
カタチは変われど
完全に無になることはないのだと知る。

(柿内未央)

さいたま見沼よみさんぽ 第40号

発行 2022年1月

編集 「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員会

〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891 Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<https://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 増田一世

印刷所 やどかり印刷



公益社団法人やどかりの里

やどかり出版



公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいたい思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。またこの度、広く地域情報をお届けするため「さいたま見沼よみさんぽ」と改題致しました。

「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員一同